

“荒れる心”に向き合って

2013年5月 片山喜章

4月17日のこと。その日は、9つの“異年齢グループ”を2コマに分けて、私が、ふれ合いゲームをする日でした。朝、活動ネタを思案し、子どもたちのリアクションもある程度、想定し、その対応法もイメージし、久々にちょっと緊張感を味わっていました。

ゲームがはじまる30分ほど前、2階にあがって、何気に活動室を覗き見ると、5歳児かもめ組のABCの3人の男の子が、D君を囲んで、A君はD君の胸ぐらをつかんで、声を荒げていました。D君も負けずにあれこれ言い返していましたが、BCの2人は、A君に加勢して、同様にD君に対して悪態をつく、“イザコザ”を目にしました。

周囲の子どもたちは“我、関せず”という様子です。ここで見過ごすわけにはいかず、D君に寄り添って背中をさすりながら、3人に、厳しい表情で『何があった？』『ふつうに話をして解決しなさい！』的な事をキツイ言葉で言いました。A君は「(子どものケンカに)大人は入ってくるな！」「あっちへ行け！」と叫んで、私を睨みつけ、BC君も、それに乗っかって「入ってくるな！」と冷笑を浮かべてくっついてかかります。

このような状況において、親ではない大人（保育者や教師）は、どうかかわればよいでしょう？この辺りの対応方法が、とても難しいのです。かかわり方によって、子どもとの信頼関係や子ども自身の“育ち”に大きな影響を及ぼします。この後、ふれ合いゲームをするので“時間はかけられない”“後でその子たちとゲームで出会う”ので、とりあえず、彼ら以上に強い口調で『ふざけるな！』『3人で1人をイジめておいて、入ってくるな！は、ないだろう！！』と目ヂカラを精いっぱい強めて睨み返してその場を立ち去りました。

ふれあいゲームでは、9つあるグループのうち、4グループと5グループの2コマに分けて行いました。そろそろ降りてきた1コマ目のグループの中にB君が居ました。先ほどの事はなかったかのように、私に近寄ってきて「今日、何するの？」と満面に期待をにじませて言ってきたので、「何がいい？ 何しよう？」と逆に尋ねてみました。

さっき、私に冷笑を浮かべていたB君の目は、らんらんと輝き「カマキリとマル虫」と答えました。B君の“みんなでゲームをすることへの期待感”が、さっきの“悪態”を退治したように感じました。“マル虫？”マル虫って、何の事かさっぱりわからない私はいっしょに降りてきた担任に尋ねました。それは、昨年、4歳児そら組のとき、クラスで流行したごっこ遊びでした。全く想定外の状況に遭遇した私は、朝、頭に描いていた活動ネタを廃棄して「カマキリとマル虫」をイメージしたものに変更しなければ、「子ども主体」のポリシーが口先だけになります（第一、マル虫だけにマルごと無視できないでしょう？）

ふれ合いゲームがはじまって、試行活動を続けながら、1つの展開スタイルにたどりつきました。音楽に合わせてみんなで歩いて♪ストップ、すると、私が老体にムチを打って“カマキリ”になって、子どもたちに本気で襲い掛かる、子どもたちはきゃっきゃっと逃げて、しゃがんで体を丸めて“マル虫”になるとセーフ、というルールです。追いかけて追い詰めても、ぎりぎりのところでうまく獲り逃がす。これが楽しさをもたらすコツです。

歩いて止まって、捕まりそうになるとマル虫になり、私が遠ざかると、起き上がって、注意を引きます。再び形相を変えて猛烈にアタックする。間一髪セーフ、このやり取りのくり返しです。途中、試しに、ストップで、グループで集まって円くなるルールを入れてみました。できてもできなくても、「10」数えたら終了。できるとスッキリし、できなければスッキリしない、その感覚を子どもたち自身が味わうことに意味がある。これが私の指導観です。回を重ねると、子どもたちどうして何としても集めようとし、異なるグループの子を見つけると、その子が属するグループに連れていく姿も散見できました。

2コマ目、ACDがやってきました。「したくない人は椅子に座って見てもよい」。これも私の指導観です。A君とD君と女の子数人が、椅子を出して見学？していました。A君は、私を疎ましいと感じていても、叱責された内容が、理不尽ではない分、葛藤している様子が2つの瞳に映ります。「カマキリとマル虫」、今回もまた、大盛り上がりでした。

それを横目で眺めているA君の姿がありました。当然、私は誘うことも気にかけることもしません。私は、本物の老人ですから、この活動は、本気（マジ）、疲れます。息切れが激しく、休息を兼ねて1人が伏せて、1人が両足を持ってひっぱる活動に変えた時、突然、A君は参加し、友達のを引っ張っていました。その時、「さすがにA君はすごい力持ちだね」とチラリと声をかけます。みるみるうちに表情が明るくやわらいで、A君に子ども本来？の生き生きさがでてきました。そこで再度、「カマキリとマル虫」をしてみました。（私にとっては厳しい肉体労働です）。さっき見学していたA君は、案の定、想定どおり、笑みを浮かべて、参加して、このゲームの楽しさを満喫していました。

昨今、保育園、幼稚園の段階で、いじめというより、乱暴に振舞う子どもの事が、話題になります。子どもの世界が、実体験よりバーチャル体験や多量のテレビ情報に侵されていること、危険、不潔等の理由で遊びに規制が多くなったこと、これらが要因だと思われます。「あの子は要注意」、「あの子はワル」という差別、侮蔑の声は、今も昔も聞かれます。その見方を根本的に改めることで、その子は改善されます。これは社会全体の課題です。

乱暴な子どもを『あの子は力がありあまっている』という善意な見方も違います。乱暴なのは、何かに押さえ込まれて、本来の力が出せない苦しさの表現です。そこを解放するためにも、今後も、ルールのある“ふれあいゲーム”を続けていきたいと思えます。